

タイ語と日本語の文末詞についての対照研究

—文末詞「na」の性質—

イソ・アパコーン

1. はじめに

日本語では自然な会話を成り立たせるために「終助詞」は重要な役割を果たしている。終助詞のような言語の要素は世界の全ての言語に存在するものではないが、タイ語にも、終助詞に相当する言語の要素が存在している。本発表はそれを「文末詞」と呼ぶ。タイ語の文末詞と日本語の終助詞は似ていると言われている。この研究の目的は、タイ語の「文末詞」と日本語の「終助詞」を比較することである。

「文末詞」とは、文末につける、伝達効果に影響を及ぼす要素を持つ文の部分である。伝達効果とは、陳述内容を強調したり、話し手の態度を表したりするものである。「文末詞」は「終助詞」のように様々な種類がある。例えば、*si*「*si*」、*na*「*na*」、*na*「*na*」、*ròk*「*ròk*」、*khra*「*khra*」、*khra*「*khra*」などである。

文末詞の使用方法は例えば、

例 1

A : *thaan khâaw dûaikan si khra*
 食べる ご飯 一緒 (文末詞) (文末詞)
 一緒にご飯を食べましょう。

B : *phôm ?im léew khra*
 私 (男性) お腹がいっぱい (完了) (文末詞)
 私はもうお腹がいっぱいです。

「*si*」 : 相手を行動に駆り立てる

「*khra*」 : 男性が上位者や目上、親しくない対等者に対して使う

thaan khâaw dûaikan つまり、一緒にご飯を食べるといふ発話内容に「*si*」の追加により、相手に「一緒に食事をすること」をすすめることになり、「*khra*」の追加により、会話全体の丁寧さが増し、AとBは男同士だということが分かる。

例 2

A1: *pai duu năy kan māi*
 行く 見る 映画 一緒 (文末詞)
 映画を一緒に見に行かない？

B1: *māi pai rōk*
 (否定辞) 行く (文末詞)
 行かない (一)。

A2: *thammai lā*
 どうして (文末詞)
 どうして (一)。

B2: *chán māi yàag pai nī*
 私 (否定辞) ~たい 行く (文末詞)
 私は行きたくない (一)。

「*māi*」 : 相手を行動に駆り立てる他、平叙文をどちらかを選ぶ答えが要求される質問文にする

「*rōk*」 : 否定文の文末につける、話し手と聞き手の認識が異なっていることを示す

「*lā*」 : 説明的な返事が求められる質問文の文末につける

「*nī*」 : 質問に対する説明的な返事の文につく

終助詞は文の終わりにあつて文を成立させ、同時に感動・命令・疑問・反語などの意味を表す助詞であり、終助詞は話し手の感情的な態度の面や、話し手の望む態度を表す助詞だと捉えることが多く、話し手と聞き手との関わり合いを示すものでもある。また、話し手の話の内容への判断なども表す。現代語の終助詞は「な (禁止)、な (感動)、か、とも、よ、ね、さ、ぜ、ぞ」などが挙げられる。それらの特徴が文末詞の役割に似ていると考えられる。が、完全に一致するわけではない。

1.1 先行研究

現在までに、日本語とタイ語の文法・統語的な様々な相違点が明らかに見られるところ、例えば、語順、テンス・アスペクト、受動文、使役表現などに関する研究が比較的によく行われている。

例をあげれば、田中寛の『統語構造を中心とした日本語とタイ語の対照研究』では、日タイの全体的な文法構造の対照研究が行われ、修飾の構造、ヴォイスの構造、モダリティ、テンスなどが取り上げられた。また、松井嘉和の『日本語とタイ語』でも様々な日・タイの対照研究が紹介されている。

文末表現に関する対照研究は例えば、高橋清子の『タイ語と日本語<si>、<na>と<よ>、<ね>の対照研究』が挙げられる。この研究では、「*si*、*na*」を話し手の確信という概念を使って説明し、「よ、ね」を話し手と聞き手の共存意識という概念を使って説明する。

発表者も修士論文において、文末詞「*na*」に対応している終助詞や、女性性のある、丁寧さや相手との距離感を表す文末詞「*kha*」と終助詞「*wa*」の対照、タイ語に殆ど訳されない終助詞などについての研究を行った。

1.2 本発表の目的

タイでの日本語教育や終助詞と文末詞の比較対照研究では、意味的や機能的に似ている部分があるため、先の高橋氏のような研究、つまり、タイ語の代表的な文末詞「si, na」と終助詞「よ、ね」が取り上げられている。特に、「na」と「ね」はよく比較されている。しかし、「na」の日本語での多様性、つまり、翻訳により、「na」はどんな終助詞やモダリティなどになるか、或いは、どの終助詞が「na」の持つ多様な機能に合致するのかの研究が不十分と思われる。

そこで、本発表はタイ語の日常会話でよく使われる「na」という文末詞を対象とし、文末詞「na」はどのような日本語に対応するかを明らかにし、そして、対応した日本語を分析し、「na」の性格をより明らかにすることにした。

今回はタイ語の小説作品が日本語に翻訳された文章を材料にし、調査・分析する。

2. 分析方法

方法は日本語に翻訳されたタイ語の小説作品の中から、文末詞「na」のある文を抜き出し、そして、日本語版の同じ文と比べていく。作品は次の2冊を用いた。

- ・ Suwanni Sukhontha (1970) 『Khau Chww Kaan』
社会問題をテーマにした小説 526 ページ
1970年東南アジア条約機構賞受賞
(岩城雄次郎訳『その名はカーン』1988年翻訳)
- ・ Khampoon Boontawee (1976) 『Luk Isan』
ドキュメンタリー小説 310 ページ
1979年東南アジア文学賞受賞
(星野龍夫訳『東北のタイの子』1980年翻訳)

用例のペアは計73ペアで、2冊あわせ、80例になるまで取って行った。そのうち、文末に来るものが73例あった。そして、その例と日本語に相当する訳を対照の例とした。

例文のペアは例えば、

場面：6歳の息子のクーンが大きくなったら、父親と狩猟に行きたいと伝えた

too khūn haāi phōm pai dūai ná pōo
大きくなる (使役) 僕 行く 一緒に (文末辞) 父
僕が大きくなったら一緒に行かせてね、父さん

このような用例に基づき、「na」が付いた文が翻訳されたとき、どのような終助詞が使われたかを調べ、「na」に対応する終助詞を見出し、そして、「na」の性格を分析する。

3. データ

調べた結果、訳文で頻用された終助詞は、
「ね」 31.50 % (23 文)

「よ」	27.39 %	(20 文)
「ぞ」	8.21 %	(6 文)
「わ」	6.84 %	(5 文)
「共起」	4.1 %	(3 文)
「な」	4.1 %	(3 文)
「ぜ」	1.36 %	(1 文)
「その他」	16.43 %	(12 文)

訳文で頻りに使用された文末表現は、終助詞の「ね」と「よ」であり、数字だけを見ると差が殆どないことが分かった。



「ね」と「よ」は、円グラフの半分以上を占めた。そして、その次は「その他」となる。

「その他」とは終助詞ではなく、「のだ」や「だろう」、「から、けれど」などで終わった文である。

「その他」の用例は例えば、

場面：クーン小父が小さい男の子、クーンに牛殺しという職業の良さを説明しているところ
pen khonkhāawuua dii ná dèknóí khuun
なる 牛殺し 良い (文末詞) 坊や クーン
/nǎŋ khau hāi lé nua dāi kin
皮 もらえる そして 肉食べられる
牛殺していいだろう、クーン坊。皮はもらえるし、肉も食えるし。

そして、「ぞ」「わ」「終助詞の共起」「な」「ぜ」の使用も見られる。「共起」とは、終助詞の共起であり、終助詞の「よ」と「ね」の共起を示す。例えば、

場面：男性の主人公トーモンが、昔付き合っていたが他の人と婚約してしまったハルタイと踊ろうとしているところ
tênram mǎi /khorj mâipenrai ná
踊り (疑問文の文末詞) 多分 大丈夫 (文末詞)
踊らない? かまわないよ

4. 分析

以上の円グラフより、「ね」と「よ」の領域がほぼ同じで、「ね」がやや多い。従って、「na」は「ね」、「よ」の両方の性格をほぼ対等に持っていることが分かった。日タイ文末表現に関する対照先行研究では、「na」と「ね」の対照に焦点を当てる傾向がある

が、「na」と「よ」の対応をさせる角度がまだ欠けている。「na」は「ね」「よ」「ぞ」「わ」などと、どのように対応しているかを見出すために、用例をその文の種類によって分類してみた。分類の基準は、文の意味と、聞き手に対する話し手の態度とした。

試みの結果、例文を以下の8種類に分けることができた。

1. 述べ立て文：相手に情報を伝える文
2. 感動文：感動や驚きを表す述べ立て文
3. 反論文：相手の意見に反対したり、相手の考えを正す文
4. 疑問文：疑問や質問を表し、相手の確認を求める文
5. 命令文：相手に自分の望む行動をさせるための文
6. 禁止文：相手に何かをさせないようにする文
7. 依頼文：話し手の希望などを聞き手に持ちかける文
8. 勧誘文：相手を誘い、自分の行動に参加させるための文

それぞれの用例は文の種類により以下のである。

1. 述べ立て文

場面：息子のクーンは友達と仲直りしたと父親に報告した

phǒm kàb candii càbməə kan léəw ná
僕 と チャンディー 握手する し合う 過去 (文末辞)
僕とチャンディーは握手したんだよ

場面：母親と息子がベトナム人のお店を訪れているところで、あるベトナム人が母親に鶏のスープと一緒に食べようと誘ったところ

nīi tōm kài ná /maa kin dūaikan
これ 鶏のスープ (文末辞) 来る 食べる 一緒に
鶏のスープだよ。来て食べなさい。

2. 感動文

場面：ハルタイが、家事の手伝いをしに来てくれたまだよく知らない地元のおばさんを褒めながら、感謝の気持ちを伝えている

chūai tham ŋaan léəw yaŋ aw
手伝う する 仕事 (完了) 更に つれて来る
lūuksǎo maa chūai
娘 手伝う
nāiyay ca hǎa khǒŋplèekplèek maa hāi lik
他に (未来) 探す 珍しいもの 来る くれる また
khon thīnīi caidee ciŋ ná
人 ここ 親切 本当 (文末詞)

手伝ってくれたうえに娘さんを手伝いに来させてくれる。

おまけに珍しいものを持って来てくれるって言うてくれる。

こちらの人はほんとうに親切なのね

ほかに、

sǎo thaarŋnīi mii tēə phūu ŋaamŋaam ná
若い女性 こちら いる ばかり 人 美しい (文末詞)
この辺の娘さんは美人ばかりだね

3. 反論文

場面：ハルタイという主人公の女性が自分の結婚式で友人のトーモンと会話をしている

トーモン：
thāa mǒo khaan khǎu thīŋ mūarai lakō
もし 先生 カーン 彼 棄てる いつ (完了)
thoraléek thūuy phǒm thanthii ná
電報 まで 僕 すぐに (文末詞)
phǒm ca pai ráb
僕 (未来) 行く 迎える

ハルタイ：

nīi man pen wanmoŋkhon ná
これ である 縁日 (文末詞)
nīi rūu w khamuaiphōon khōŋ khun
これ (疑問) 祝辞 の あなた

トーモン：カーン先生に棄てられたら、すぐに電報を打ってね。迎えに行くから

ハルタイ：今日はおめでたい日なのよ。これがあなたの祝辞なの？

4. 疑問文

man yuu thīnāi kan ná lūuk
あれ ある どこ 一体 (文末詞) 子供 (二人称)
/klāi rūu klai
近い 或いは 遠い
それはどこにあるのよ、お前。近いの？遠いの？

5. 命令文

場面：男の子クーンが従兄弟の姉が恋人に抱きつかれるところをこっそりと見ている場面で、クーンは心の中で思った

thāa man khāumaa gōd tii ləy ná
もし 奴 近寄る 抱く 叩く すぐ (文末辞)
奴が抱きついたら、引っ叩いてやれよ

6. 禁止文

場面：男の子クーンが恋人と言いついていてるところ

yàa khāumaa ná
(禁止辞) 近寄る (文末辞)
こっちへ来たらだめよ

7. 依頼文

場面：引っ越してきたばかりのハルタイが地元の親子に遊びに連れて行ってと頼んでいる

Phaa chǎn pai bāan ná
連れる 私 行く も (文末詞)
わたしも連れてってね

8. 勧誘文

場面：用事が終わって、姉がクーンと一緒に帰ろうとするところである。

klàb kan ná khuun
帰る 一緒に (文末辞) クーン
クーン、帰ろうよ

「na」の使用回数の表

	述立文	感動文	反論文	疑問文	命令文	禁止文	依頼文	勧誘文	計
ね	2	7	-	1	5	1	6	1	23
よ	5	-	4	-	2	4	-	5	20
ぞ	1	1	-	-	2	2	-	-	6
わ	2	-	-	-	-	2	1	-	5
な	-	3	-	-	-	-	-	-	3
ぜ	1	-	-	-	-	-	-	-	1
共起	-	-	2	1	-	-	-	-	3
他	6	-	-	5	1	-	-	-	12
	17	11	6	7	10	9	7	6	73

「na」の使用回数を表でまとめて分かったことは以下の通りである。

1. 色刷りのところが一番頻繁に使われた文末表現となる。
2. 「na」と「よ」、「ね」の対応については、感動文・反論文、命令文・禁止文、依頼文・勧誘文で、「よ」か「ね」が一番頻繁に使われており、また「よ」と「ね」の一方が多ければ他方が少ないとはっきりと分かれており、際立った対照を見せている。
3. 「na」への対応は「よ」と「ね」以外に「ぞ」「わ」「な」「ぜ」や「終助詞の共起」なども見られるが、終助詞以外の「その他」のところでは、述べ立て文と疑問文で多く見られる。
4. 「na」への対応は「その他」で12例(16%)も見られ、「na」自体の多様性が明確である。

5. まとめ

1. 訳文から見た「na」の性格は
感動文、命令文、依頼文では「ね」がよく使われている。
反論文、禁止文、勧誘文では「よ」がよく使われている。
2. 「na」は、主に「ね」と「よ」に訳されているが、「その他」の訳し分けが多彩になされていたことが分かった。
3. 「na」は、文を終わらせる働きをし、終助詞的

な用法を持つ終助詞以外のものにも対応していることが分かった。

本発表ではタイ語の原文の文の種類別による文末詞「na」への対応を調べてみた。結果は「ね」と「よ」の使い方が文の種類によって一方的だと分かった。しかし、どのような仕組みからこのように一方的になるのか、またどのような仕組みで終助詞が使用されたり、或いは終助詞でない文末表現が使用されるのかは今後の課題として調べてみたいと思う。

参考文献

- Watcharapon Booppanimit 1996 “Discourse markers in casual conversational of Bangkok Thai speakers” チュラーロンコーン大学修士論文
- 佐治圭三 1957 「終助詞の機能」『国語国文』26. 7
- 白川博之 1992 「終助詞『よ』の機能」『日本語教育』77
- 高橋清子 1991 「タイ語と日本語—<si>. <na>と<y>、<ne>の対照研究—」大阪大学卒業論文
- 田中寛 2004 『統語構造を中心とした日本語とタイ語の対照研究』ひつじ書房
- 陳常好 1987 「終助詞—話し手と聞き手の認識のギャップをうめるための文末辞—」『日本語学』6. 10
- 松井嘉和 1998 「日本語とタイ語」玉村文郎編『新しい日本語研究を学ぶ人のために』
- 宮崎和人 2002 「終助辞『ネ』と『ナ』」『大阪日本語研究』14